

〈共生〉の実験

——高島援農合宿，仮面劇合宿，社会人学生——

栗原 彬

はじめに

私の演習は「政治社会学演習」。政治システムと社会構造について学習するのは当然だけれども、私たちの演習では、システムや構造や制度を自分たちの生活や身体に差し戻す過程を学習の射程に入れている。つまり、政治や社会の仕組みを単に仕組みとして理解するだけでなく、私たちの自治の活動、自己決定性の問題、共生の方法、市民活動、ネットワークングといった身体を動かす活動を、仕組みとの関係に解きほぐしながら組み立てていく思考と行動の実験をする。そのために、ワークショップやフィールドワークで、意思決定、自己表現、コミュニケーション、対話、ネットワークングなどのトレーニングをする機会を設けている。参加者は法学部の政治学系の学生が多いが、他学部や他大学の学生もいる。演習には何人かの社会人学生も参加する。演習を活性化する上で社会人学生の果たす役割は大きい。

私たちの演習では、夏休みのはじめに、山形県高島町に援農合宿を行なうが、援農合宿の言い出しっぱは1人の

社会人学生である。今では高島に住んで有機農業をやっているその社会人学生OBが、現地での援農先のアレンジメントをしてくれている。編集部意向に沿って、最初に社会人学生制度について説明し、次いで私の演習の内容を、合宿を中心に紹介することにした。

(1) 社会人学生とともに20年

社会人入試のねらい

立教大学法学部が、全国に先駆けて社会人入試を実施したのは、1979年度からだった。98年度入試でこの制度は20年になる。法学部はなぜ社会人入試を始めたか。それは、偏差値によって輪切りにされた同年齢集団という大学教育の構造に風穴をあけて、学生層を多様化することで大学教育を活性化するためであった。将来の大学像へのチャレンジと生涯教育の視点も、そこには含まれていた。

社会人学生の定員は1学年30名だから、キャンパスには120名前後の社会人学生がいることになる。出願資格は22歳以上。選考は3段階にわたる。①

書類選考（本人の志望理由書と3人の推薦状3通）②筆記試験（英語は基礎的な読解力を問う。辞書1冊持込み可。論文のテーマは広く人間と社会にわたる）。③面接試験。最終的な可否は、②と③の結果を総合して決定する。

第1期1979年度の出願書提出者257名を別として、2期目以降の出願者数は一貫して100名から120名の間を推移してきた。しかし、1997年度は出願者の減少が顕著で、私たちは危機感をもっている。経済不況が続いているほか、今日では社会人入試制度が普及して、どの大学でもこの制度を導入したばかりか、本学部が4年制であるのに対して、大学院を含むさまざまな制度が実施されるようになって、社会人学生の選択肢がふえたことが減少の原因になっていると考えられる。

社会人学生の属性と傾向

合格者について見ると、年齢別では、20代後半から30代が大多数を占め、40歳以上は約20%である。性別では女性が多い。最初の数期こそ男性も健闘したが、それでも女性が60~70%台だった。ところが第7期1985年度からは女性が80%台にはね上り、男性が10%台に低下した。ちなみに出願時では女性が60%前後だから合格者中の女性の比率は出願時より高くなる。学歴別合格者は、全日制高卒が65%前後、大学・短大卒が25%前後、検定その他が10%前後である。現職別合格者は、年により大きく変動するが、一般企業が

50~60%で、個人企業、公務員、主婦がそれぞれ10%前後という感じである。居住地別では、東京・関東圏が圧倒的であるにしても、広く全国に分散している。

以上の傾向から、次の点が指摘できる。①20代の若い社会人は比較的身軽で、思い切った転身ができる。②30代後半~40代の男性は、多く会社と家族に緊縛されて4年間の社会人学生はきわめて困難である。③子育てを終った30~40代の主婦が、モラトリアムを得て社会人学生となるケースが多い。④定年退職・会社の経営が軌道に乗ったことなど、人生の一定の達成の上に自分のやりたい学習をし、資格取りにチャレンジする場合がある。

学びの動機

合格者への入学時のアンケート調査から、社会人学生として学びたい動機の類型が浮び上がる。①経済的困難、保護者の死、親の反対、病気などによってかつて大学への進学を断念した。今、進学の夢を果したい。②このままの人生に疑問、夫の帰りを待つだけの人生を変えたいなど。人生のやり直しのきっかけとしたい。③自分探し、生きがい、アイデンティティを求めて。④仕事を向上させたい、仕事での人間関係を変えたい、営利の仕事に飽き足らなくなったなど、仕事がらみの動機。⑤弁護士、国家公務員になりたい。資格を取りたい。⑥学歴がほしい。短大卒コンプレックスを解消したい。⑦広

い知識・教養をもちたい。系統的に学びたい、など。⑧社会福祉の仕事をするため、市民活動に関わってきて財政や法律の知識が必要になった、医療看護職を通して国際協力をしたい、高齢者問題と取り組むため、など。

たいていの場合、動機は複合的だが、とりわけ敗者復活、やり直しの意識と自分探しとを含んでおり、若者のものと言われてきた「モラトリアム→アイデンティティの探求」ということが、社会人学生においてかえて純粋に実現されている。それだけに経済不況はモラトリアムの機会を狭める。⑤⑥のタイプとともに、⑧のタイプがわずかずつにせよ確実にいることは注目に値する。

推薦状の中には、出願者が主婦の場合、夫や娘が書く場合がよくある。まだ中学生の娘が、「最初お母さんが大学を受験したいと言いだしたときにはびっくりしました。しかし、話を聞いてみるとお母さんの勉強したい気持ちがよく分かりました。ぜひお母さんを入れてあげてください。」などと推薦状を書いてくる。母の熱意を受けとめた家族の思いが伝わってきて、書類審査をする教員が感動する場面である。

教室の社会人学生

社会人学生は、若い学生より学ぶことに貪欲である。親がかりでなく、貴重なお金と時間を使っての勉強だから、学ぶことに熱心なのは当たり前と言える。当たり前である。大教室の講義では、最

前列の席は常に社会人が占めている。私は政治社会学の講義をするとき、よく社会人学生と目が合う。社会人学生がくい入るような視線で、身を乗り出すようにして、講義を受けとめようとするからである。教員は誰でもそうなりがちだが、講義をしているときにノリの状態に入って、話が抽象的になったり、上すべりしていくことがある。そういうとき、教員より年上の社会人学生の目が「私はあなたの話が分らない」と告げてくれる。私は、こうして、社会人学生の表情にはっとして、何度講義の軌道修正をしたことだろう。

演習では、社会人学生はもっと本領を発揮する。社会生活の経験に裏打ちされた問題提起は迫力があり、一般学生に新しい視角、異なるものの見方を提供してくれる。高齢化社会、福祉、経済、家族、食糧、環境、医療、人権、地域活動など、社会的な問題への関心が強いことも、大学の教学の方向に示唆するところが大きい。

社会の中の社会人学生

九州の医療機械メーカーの会社の社長が入学したときには、社員たちに、「社長、4年間の勉強が終わったら必ず会社に戻って来て下さい」と激励されて上京してきた。ウィークリーマンションで单身生活を送りながら猛勉強した。彼の趣味は自家用飛行機に乗ることで、卒業する時には、「先生、九州に来られる折には連絡して下さい。飛行機で九州中をご案内しますから」

と言って故郷へ帰って行った。

実に面白い社会人学生たちがいた。銀座のバーのマダムが入学したときには、新聞やテレビで話題になった。卒業後、評論家として有名になった人や、大学の教員になった人もいる。

社会人学生の中から、経済上の困難、つれあいの転勤などによって、年に2,3名から7名ほど、すなわち8~30%の退学・除籍者が出る。社会人学生にとって4年間の学生生活は厳しい。

しかも、社会人学生の就職状況も厳しい。年齢制限の壁があるからだ。それでも、彼らは卒業後時間をかけて仕事を探したり、志を生かせる職場との出会いをねばり強く求めたり、在学中の仕事が就職につながったり、ともかく「卒業即就職」という一般学生の図式からはかけ離れている。

先に述べた通り、経済不況が続き、社会人学生の選択肢が増すほどに法学部への出願者は減少する。このことについてどう対応していくか、今後の課題である。4年制だけでよいか。奨学金制度を充実させる必要があるほか、社会人学生の育児をめぐって起る問題への対応、たとえば育児室の設置といったことも今後の課題である。社会の側に、年齢制限、給与体系などに見るように、社会人学生を受け入れる姿勢がほとんど形成されていないことも大きな問題である。社会人学生の受け皿が多方面で開発される必要がある。

(2) 田の草取りをしたり、仮面劇をしたり

言い出しっぺは社会人学生

政治社会学演習に参加した社会人学生の1人が、「先生、高島でゼミ合宿をやりましょう」と提案した。山形県東置賜郡高島町は、有機農業の里として知られている。有機農業の早くからの実践者で、農民詩人でもある星寛治さんが、立教大学の学生部セミナーで講演されたこと、学生部の高島フィールドワークが始まったこともあって、高島と立教とのおつき合いの機会がふえていた。ゼミの社会人学生は、何度も高島に足を運んで援農の経験を積んでいたばかりか、高島が気に入って、ここに住んで自分も有機農業をすることを考えていた。彼に高島でゼミ合宿をやることをすすめられて、私は「うーん、高島は遠いからね。」と答えた。しかし、山形新幹線が開通しているから、そんなに時間がかかわるわけではない。「温泉がありますよ」と言われて、「よし行こう」と返事をしてしまった。こうして高島での援農合宿が始まった。

ブラインド・ウォークを楽しむ

政治社会学演習は、前期はテーマに即して文献を読む。5月か6月に、1泊2日の最初のゼミ合宿をする。この時必ずブラインド・ウォークをする。2人がペアになって、1人が目をつぶり、他方がサポーターになって30分間

散歩をする。口を一切きかないこと、目をつぶった方は何があっても目をあけないことだけがルールである。2人は互いの関係をつくりながら、さまざまな物に触れていく散歩を楽しむ。30分たったら、目をあけて、感じたことを一言ずつ述べ合う。ついでペアの中で役割を交替して、先にサポーターだった者が今度は目をつぶってブラインド・ウォークをする。

30分ずつの散歩の中で、2人の関係が変ってくるし、自然との触感も変化していく。日常生活で圧倒的に依存している視覚とことばを遮断することによって、普段意識化されにくい嗅覚、触覚、聴覚がフル動員になることが分かる。ブラインド・ウォークは奥行きが深い。最初の合宿では、新聞の社会面の記事を使って新聞劇をつくり、上演したり、状況設定と役割だけ決めておいて会話を自由に進行させる社会劇をやることもある。

高島で学ぶ

八月初旬に、高島の援農合宿に出かける。3泊4日の合宿で、民俗資料館と名づけられ一軒家で自炊して寝泊りする。昼間は数名ずつ分かれて有機農業の農家に行き、その家が望む仕事をする。田の中に入ってひえ抜きをしたり、畑の草取りをしたり、じゃがいも掘りをしたり、ぶどう摘みをしたり、実もたわわりんごの枝に支え木をしたりする。援農先で昼食を頂き、昼寝をする。家族との語らいも楽しい。夕



高島援農合宿

方は民俗資料館に戻ってきて、食事当番は夕食の準備にかかり、他の者はクルマを連ねて近くの温泉に行く。高島駅は、車を降りて改札口を出るとすぐ左手に「ゆ」という大きなのれんがかかっている。駅の中に温泉があるのだ。そのほかにいくつも温泉があって、毎日違う温泉に入りに行く。夜には、星寛治さんはじめ、有機農業家の話を聞き、ディスカッションを行なう。

今、高島には23名の若者が外からやってきて住みつき、有機農業をやっている。それらの若者を受け入れる高島は本当にふとこころが深い。私のゼミからは、男性1人、女性1人が高島の住人になっていて、それぞれ社会科の臨時教員とスクールバスの運転手、および町役場の職員として生計を立てながら、有機農業をやっている。立教大学の関係者はほかに2人いるから、実に立教から4名が高島で暮していることになる。

1995年に高島を訪れたとき、民俗資料館の1室に1人の若者が住みついていて。彼は福島県の大学の学生だった。

彼は生まれたときからずっと浅草に住んでいた。しかし80年代の地揚げで彼の住まいの周辺は光景が一変してしまった。彼はそれを「露地が消えた」という。露地がなくなったら、自分はここに住む理由はない。福島県から山形県へ抜けて、高畠に入ったとたん、何が他の場所と違うことを感じたという。「あ、ここに露地がある！」彼はここに住みたいと強く願う。彼は、星さんに相談に乗ってもらって、町役場の職員採用試験を受けることに決めて、上和田有機米生産者組合の好意で民俗資料館に泊めてもらい、受験の準備をしているところだった。次の年の春、彼から町役場の試験に合格して職員になった、という朗報が届いた。

「なぜ政治社会学のゼミが高畠に？」
「援農合宿の効用は？」何年前ならゼミの学生にさえ聞かれたことがあった。アカデミズム一筋の社会学者にいぶかしげに聞かれたこともあった。私はタテマエの答を用意している。「効用」ならいくらだって並べ立てることができる。「いやー、まず自然との共生っていうことをからだで感じ取るってことですかね。日常と異なる他者との出会いということもあるし。有機農業の中に環境持続型の先端的な産業のあり方を見て取ることもできるんですよ」といった具合。しかし、私も学生も、それとは別の「高畠の誘惑」を感じ取りながら、それは語らないでおくという默契が成り立っているように思う。それが「場所」という感覚に

近いことは確かである。しかも、「この場所へ！」という動きのある感覚。

小諸で仮面劇合宿

夏休みの終り、秋の入口には、長野県の小諸で仮面劇合宿を行なう。この合宿は、年来の友人、演劇家で横浜ポートシアターの主宰者の遠藤啄郎さんのワークショップとして展開する。10数年来続いているこの合宿では、いろいろな試みをしてきた。「不動明王真言慈救呪」を複式呼吸で唱えながら声を出すこと。「公害」とか「難民」などの具体的なことやものを集団で表現するゲーム。仮面をつけて、全身で「炎」を表現すること。仮面をつけて「出会い」をやること、など。

たとえば、「日曜画家」というテーマがある。仮面をつけて、ことばは用いない。へっぴょこ日曜画家がイーゼルをかかえて楽しそうに原っぱへやってくる。景色をあれこれ品定めして、適当な景色を見つけて絵を描き始める。もちろんイーゼルも絵具も一切実物なしでやる。そこへ1人の通行人がやってくる。通行人は感心して絵をのぞきこむ。絵をほめる。うまい。いい絵だ。2人して喜び合っているところへ玄人の画家がやってきて、絵をバカにする。そこで日曜画家と通行人の昂揚した気分もしばみ、2人はすごくすごく去る。これが筋書である。

あるとき、日曜画家の役をやった学生が、見ている学生たちの視線に押されるように我知らず後へ下がっていき、

遂には壁に背中がぴったりついてしまった。うしろから通行人が絵をのぞきこむことができなくなり、また玄人の画家も日曜画家の後方を通れなくなって、3人で押し合いへし合いをしたことがあった。その後、仮面をはずしながら「なぜか分からないけれど、からだの後へ動いちゃうんだ」と笑いながら言った学生は、合宿の前と後とで劇的に変わった。全てに引っ込み思案で、自己表現が乏しかった学生が、積極的に自己表現し、他の人とコミュニケーションをするようになった。

仮面をつけることで、そこに起ることは、他者とのコミュニケーションの動きが見えてくること、そして自分で自分を見ることができること、更に思いもかけない自分を自分の中に見出すことなどである。小諸合宿がやみつきになって、横浜ボートシアターで演劇をやっているゼミOB・OGが今のところ3人いる。

遍歴・修業時代を楽しみたまえ

小諸から帰った後、後期は、学生各自の取り組むべきテーマを登録しても

らい、サブ・グループを作って研究を進め、順次中間報告をしていく。秋の終りには、フォーラム「環境と生命」にゼミの学生も関わる。学期末に最終レポートを提出して、学生たちで論文集を作る。

3月半ばには、4年次生の追い出しコンパを兼ねた最後の合宿を行ない、この1年の“私の政治社会学”をふりかえると共に、今後の自分の課題を述べる。

ゼミ合宿を起点に、多くの学生が大学の外にいわば武者修業に出かける。高齢者のケア施設でボランティア活動をしたり、水俣に行き、水俣病患者の甘夏畑の草取りをしたり、沖縄に行き、基地問題と取り組む沖縄の若者と出会ったりする。1996年秋に品川駅前の空地で開かれた水俣・東京展にも、ゼミの学生が自発的に参加した。私は、政治社会学演習、とりわけゼミ合宿が、学生たちが将来自ら切り拓くだろう市民的公共性へのささやかな助走路になることを願っている。

(くりはら あきら 本学法学部教授)